

〈書評〉

洪 郁如 著

『近代台湾女性史
——日本の植民統治と「新女性」の誕生』

(勁草書房 2001年 x, 409頁, xiv ISBN 4-326-60147-7 9,500円)

何 玮



本書は、日本植民統治期台湾の歴史舞台に登場した「新女性」の形成過程とその社会的な位相を究明する研究である。本書の特色は、「女性」を均質的な集合体として叙述してきた従来の中国大陆および台湾の女性史研究とは異なり、「新女性」を階層、学歴、年齢などの属性をもった存在として取り上げ、その誕生と位相を植民地社会の歴史的な文脈に再現し、考察を行なっている。また、これまでの日本植民統治史研究は、階級や民族要因は重視しても、ジェンダー要因については、ほとんど無視してきたが、本書で著者は、「新女性」の誕生と位相を規定した「植民者の統治権力と在来社会の家父長制という二元的権力構造」(p. 360)をジェンダーの分析概念に基づき、析出することを試みている。それにより、従来の日本植民統治研究の叙述の中に定着化された図式——植民地社会の権力構造の「支配—被支配」の問題性を暴露し、植民統治権力の協力者としての台湾人家族の存在も考察の対象としたことが、これまでの先行研究と比較して画期的な研究成果をうむことにつながったといえよう。

全体の構成に沿って、本書の内容を要約しながら、その議論展開の特徴を把握していこう。本書は、大きく第一部『「新女性」の形成』と第二部『「新女性」の位相』に分かれるが、第一部では、「新女性」の誕生は、如何なる歴史的な醸成過程を経由しているのか、更にそのより直接的な歴史的要因とは何かを述べながら、1920年代以降に登場した「台湾人最初の女子教育世代」(p. 152)の「新女性」の量的な規模、家庭環境、ライフコースおよび彼女らに見られた「高女文化」の階層性、日本色の特徴¹などを考察している。

議論展開の面では、特に次の二点に注目したい。第一に、著者は「解纏足運動」²及び女子教育の展開過程を、植民者の統治権力と台湾人家族の相互作用の中で捉えようとしている点、第二に、女子教育に関する通時的な変化について、著者は統治権力と台湾人家族との間の流動的な絡み合いを、近代台湾という特定の歴史的な社会的状況下の現象としてとらえようとしている点である。要するに、著者は「新女性」の誕生と展開の要因に対する個別的な探究にとどまらず、共時的な相互作用および通時的な絡み合いの中から、事象発生とその展開状況を把握しようとしているのである。このような作業を通じ、著者は統治側と台湾人紳士が、台湾人女性に関する新たな規範³を、如何に合理化させ、またどのように台湾社会に実現させようとしていたのかを、その過程を再現することによって、「女性」というジェンダーがどのように歴史的に構築されていったのかを明らかにしている。また、総督府が、台湾人社会の上流階層の女子教育のみを重要視する意向を持っていたため、結局、植民地女子教育は、女性間の序列

を計るために利用される基準の一つになったということを結論付けるとき、著者は、女性という集団の内部に、女性間の序列化がどのような要因によって、いかになされていったかを、解明している。

第二部においては、「新女性」の位相を、主に知識青年により提起された恋愛結婚に関する議論がもたらした両性関係の変容や、可能な社会活動の範囲、新エリート家庭の理想的な家庭像及び「新女性」の家庭における役割分担の実態、エリート層が生み出した新たな家庭文化の特色という面から検討している。

著者はまず、「新女性」をめぐる新たな両性間の関係性がどのように問題提起され、更に議論されていったのか、それらの議論の結果として、両性間をめぐる新たな規範は台湾社会に如何なる変容をもたらしたのか、などを考察している。具体的にいえば、主に日本に留学している台湾男性知識人が恋愛結婚に関する問題提起や団体活動を行なった結果として、「新女性」をめぐる新しい両性関係は植民地台湾社会に議論されるにいたった。恋愛結婚を主張する台湾男性知識人の議論には「恋愛を前提とした結婚」(p. 194)、「本人意思の尊重」(p. 198)、および「新しい結婚条件の提案」(p. 201)という三つの内容が含まれている。これらの議論が展開されているうち、見合いや婚前の交際などの変化が台湾社会に多く見られるようになったという。

「新女性」の社会活動が可能な範囲を探る際、著者は「新女性」の受けた複合的な制約のありさま、例えば、「新女性」の抗日運動参加の場合に、植民統治権力側と台湾人家族から二重の牽制を受けた状況を明らかにするのである。ここでも、「新女性」のありかたを、それを規定した権力構造内部の絡み合いをとおして、詳細に分析している点は、第一部の論じかたと同じである。

第一部と第二部に見られたように、著者は、一貫して、ジェンダーを分析概念として駆使し、「新女性」と植民地権力構造の間に存在した流動的な関係性を可視化することによって、「新女性」の誕生およびその位相を、孤立した存在ではなく、植民地社会の文脈の中から読み取ろうとする。これにより、著者は「新女性」を歴史的な存在として叙述することができたのである。それと同時に、著者のねらい——本書を単なる近代台湾女性史としてだけでなく、日本の台湾統治の社会史として読まれる (p. ii) こと——も実現させ得た。つまり、著者は、日本植民地統治が、近代台湾社会にもたらした社会的な意味の多様性、複雑性を、「新女性」を軸に究明することに成功したのである。更に重要なのは、上記の作業を通じ、著者が「女性」というジェンダーも、男性／女性の関係性も、歴史的、社会的に構築されたものである以上、その構造的な変化も十分可能なことだと同時に示してくれたのである。

本書の「はしがき」に、これまで日本で行なわれてきた日本による台湾植民地統治に関する歴史記述の中に現れた、固定化された論述のマトリクスともいえる「加害」「被害」という構図に対しては、著者は疑問を投げ、次のように述べている。

「日本の植民地統治が台湾人の生活に残した痕跡は、われわれが想像する以上に根が深く、かつ複雑なものだったといえる。だからこそ、『加害』や『被害』の実態究明のレベルに議論を止めるのではなく、台湾人一人一人がかつて辿った軌跡というものを、外からではなく植民地社会の内側から解読しようとする発想への転換が必要な時期に来ていると思う。」(p. i)

ここでは、著者が植民地社会の外部——「日本-台湾」という国家間の関係史の角度から、日本によ

る台湾植民地統治にアプローチするのではなく、植民地社会の内部の人間にとっての日本植民地統治の社会史的意味を究明する必要があると提言している。本書は、まさに著者が上述の考えに基づいて行なった一つの実践といえよう。また、このような果敢な実践は、「新女性」と直接に接触できることや、彼女らに見られた戦後台湾の社会文化の植民地痕跡を実際に触れることが可能であること (pp. 405-406) により成し得たものであり、著者に「新女性」や植民地社会に対する理解を深める一因になったといえるであろう。

最後になるが、評者としては、ジェンダーの分析概念を駆使し、社会史の角度から、日本の植民地統治と台湾女性との関係にアプローチし、叙述しようとする著者の思考と実践を、高く評価したい。それも本書は、評者自身の抱えている近代中国女性史研究の土台となっている、主に中国大陸で展開された、従来の研究の中に存在している問題を改めて認識させたことに関係している。確かに90年代に入ってから、李小江が「20世紀（中国）婦女口述史」という研究プロジェクトを起動させ、現在も研究活動を続けていること⁴や、羅蘇文 [1996] の『女性与近代中国社会』⁵などは、中国大陸のほうも社会史としての女性史研究が行なわれはじめたことを意味するが、しかし、本書のように、ジェンダー視点に基づき、研究対象を「新女性」のような、階層、学歴などの属性をもった存在に限定し、その誕生と位相を考察することを通じ、植民地台湾社会の一断面を描き出す (p. ii) というレベルの社会史としての女性史研究はまだ現れていない。したがって、本書は中国大陸で展開されてきた近代中国女性史研究にも示唆を与えるところが多いと思う。

「新女性」に見られたような、戦後の台湾社会の文化をも規定しつつある、エリート層の階層文化の特徴を明らかにした本書にとって、「民衆的台湾社会の史的考察」(p. 374) は直面すべき課題だと著者は、本書で述べているが、著者のより一層の研究成果を期待したい。それと同時に、実物としての「新女性」に現れた階層性の問題だけにとらわれず、文化表象としての植民地台湾の「新女性」に関する検討も、今後のもう一つの課題として考えられるのではないかと、評者は思う。

(ふー・うえい／お茶の水女子大学人間文化研究科博士後期課程)

注

1. 本書では、日本語と日本の礼儀作法を学習するという特徴を指す (本書 pp. 171-174)。
2. 本書においては、纏足廃止運動という意味。
3. 著者によれば、纏足を「陋習」と見なすことや女子教育の重要性という規範 (本書第一部参照)。
4. 李小江ほか『歴史、史学与性別』南京：江蘇人民出版社、2002年、pp. 203-205。
5. 羅蘇文『女性与近代中国社会』上海：上海人民出版社、1996年。

*本書は、平成14 (2002) 年度、第17回「女性史青山なを賞」受賞作である。(編集事務局注)